

■テーマ展

「えみし」社会の誕生 — 今明かされる! 「えみし」とその系統!! —

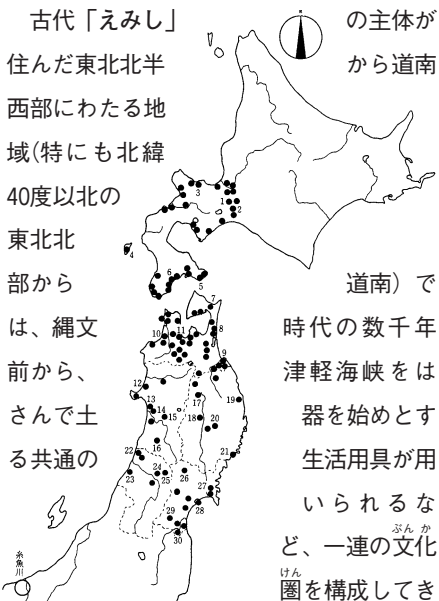
会期 平成17年3月2日(水)～5月5日(木・祝) 会場 特別展示室



7世紀後半の「えみし」社会 本展覧会では、そうした人々を「えみし」と表現し、「えみし」社会の誕生とその末裔たちについて第Ⅰ～Ⅳ部構成で紹介いたします。近年、各方面で北東北三県を中心とする地域連携の動きが高まっていますが、「えみし」社会の主体は、正にこの地域にありました。本展覧会を通じて、岩手県民を始めとする皆様方の郷土に対する理解と愛着がより深まりますれば幸いです。

第Ⅰ部 津軽海峡をはさむ地域性

古代「えみし」の主体が住んだ東北北半から道南西部にわたる地域(特に北緯40度以北の東北北部からは、縄文前から、すでに土器の共通の文化圏を構成してきてきました。中には、信仰や祭



祀と結びついた岩偶やクマを意匠した造形などにみるように、精神面でも相通じるものがみとめられます。

この地域は、ゆるやかに結びついた共通文化圏とでもいうべき一連のまとまりを保持してきたのです。そして、共通文化圏は、新潟県糸魚川市姫川産のヒスイの分布状況などや世界の諸民族の例が物語るように、一連の交易・通婚圏を構成し、通じ合うことばを共有してきたと考えられます。

ここでは、こうした地域性を「えみし」社会成立の背景としてとらえ、ことばも含めて相通じる文化について紹介します。

第Ⅱ部 「えみし」社会の誕生と倭国

弥生時代後期になると、西日本を中心とする倭人社会の政治的統合に伴う激動を背景として共通文化圏が解体します。すなわち、倭人社会は、3世紀前半までには奈良盆地を中心とするヤマトを拠点とした邪馬台国を盟主として政治的に統合され、前方後円墳の造営に象徴される古墳社会へと移行します。そして、邪馬台国連合は、3世紀後半には東北南半以南の東日本をもとり込んで古代国家倭国へと変貌を遂げるのです。

日本列島中央部の激動に端を発する緊張により、北海道中央部を中心として用いられてきた後北式土器が全道に展開し、さらに樺太(サハリン)と千島列島の南部にま

で拡大します。そうした土器を始めとする文化要素はまた、4世紀前半には津軽海峡を越えて東北北半域を中心に出現します。それは、まるで北海道を中心とする南北地域をより大きな文化圏(以下、拡大文化圏に表記)にまとめるかのようにみえます。

その後も、東北北半から道南西部にわたる地域には、ほぼ古代を通じて生活様式や価値観の共有がみえてとれ、一連の社会を構成します。そこにも、共通文化圏と同様、通婚と交易、相通じることばの共有があったと考えます。この地域の古代の住民は「えみし」ですから、こうした相通じる絆を「えみし」社会と呼ぶことができます。

ここでは、拡大文化圏の南半を構成する「えみし」社会が、かつての共通文化圏の伝統を継承する性格をもつものとする視点から、その誕生について紹介します。

第Ⅲ部 「えみし」社会と律令国家日本国

7世紀後半には、倭国は中国唐の律令制をとりいれ、律令国家日本国へと変貌を遂げます。その後、日本国は東北北半域の領有を策し、在地「えみし」社会との間に厳しい緊張を招きます。一方で、この時期には、「えみし」社会もまた、集落の急増が物語るように、倭国・日本国との交流と対立、抗争の中で成熟期を迎えるのです。

また、この時期、ケズリやミガキを多用する土器(土師器)、畑作農耕、カマドをもつ方形の竪穴住居などの東北北半「えみし」社会の文化・生活様式は、道南西部を中心とする渡島「えみし」社会に受容され、北海道に擦文化が成立します。一方、律令国家は「えみし」社会に侵攻(いわゆる征夷)するとともに、服属・朝貢した「えみし」を俘囚などに位置付け、下賜品や酒食を供するなどして懐柔します。



後北C₂・D式土器 [左:青森県東通村大平貝塚出土(東通村教育委員会蔵)、右:軽米町大日向Ⅱ遺跡出土(岩手県蔵)] 北海道のものに比べると、ともに大型で、さらに右はかなり厚手です。



沈線をもつ土器 [左：鋸齒文・盛岡市台太郎遺跡出土(岩手県蔵)、右：幾重もの横走文・北上市五条丸古墳群出土(北上市教育委員会蔵)]

ガラス玉や帯金具、鉄製の農具や武具、馬具類などの律令国家と「えみし」社会との交流と抗争を雄弁に物語る資料といえます。また、7～8世紀の蕨手刀や錫製装身具、在地「えみし」の家父長層を葬った群集墳、この地域に特有の頸部や口縁部に格子や鋸齒(ノコギリの刃)状あるいは幾重もの横走する沈線(棒状の工具でつけた線)をほどこす土器などから、律令期の「えみし」社会について紹介します。

第Ⅳ部「えみし」の末裔たち

10世紀には日本国は律令制がくずれ、王朝国家と呼ばれる体制へと移行すると、「えみし」社会には、いわゆる奥六郡の安

倍氏、山北三郡の清原氏に象徴されるような、有力な倭囚勢力が誕生します。これらは、12世紀の平泉を拠点として繁栄した藤原氏4代も含めて、母系を通じて「えみし」の系統に連なるものと理解されます。

こうした和人化して久しい倭囚社会では、日本国の支配が及ばない、北の社会を異質なものとみなし、エゾと呼ぶようになります。エゾは、や

がて東北北北北域の人々「えぞ」を指すようになったと考えられます。つまり、古代「えみし」の系統は、王朝期以降、和人化



中世下北アイヌの骨角器類 [東通村浜尻屋貝塚出土(東通村教育委員会蔵)] 同時代の北海道アイヌのものとは本質的に異なることはありません。



「えぞ」社会の土器 [秋田県大館市上野遺跡出土(大館郷土博物館蔵)：左2点が北海道に起源をもつ擦文土器、右は把手付土器]



カバラミブ(アイヌの木綿上衣)・表紙掲載資料の裏面

するものと「えぞ」へと連なるものとに二分化したこととなります。

近世、アイヌ社会は日本国からエゾと呼ばれ、北海道を始めとして樺太南部、千島

列島を経てカムチャツカ半島南部などに居住し、盛岡藩域の下北半島、弘前藩域の津軽・夏泊半島などにも点在していました。北海道を中心とするアイヌ社会の成立は、おおむね鎌倉時代(13～14世紀)とされ、それは近世本州アイヌが居住した青森県北部にまで及んだと考えられます。東通村浜尻屋貝塚出土資料は、中世下北アイヌの生活の一端

を知る資料となります。

ここでは、「えみし」社会の一部は、中世初頭に成立する「えぞ」社会の一半を構成し、鎌倉時代のアイヌ社会成立以後も、和人化することのなかった「えぞ」が、アイヌへと連なっているとする視点を提起します。

本展覧会に貴重な資料をお貸しいただきました関係機関、並びにご高配賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

(主任専門学芸員 女鹿潤哉)

展示解説会(会期中第2・4日曜日[3/13・27、4/10・24]と5月5日[木・展覧会最終日]/特別展示室/13:30～14:30)